

平成14年度漁場環境監視等強化対策事業（抄録）

萩平 将・加藤 慎治・宮田 匠

漁場環境の変化を監視することを目的として、鳴門市内の海における水質、底質、底生生物及びアマモ藻場の調査を実施したので、その概要を報告する。なお、本事業の詳細については平成14年度漁場保全推進事業調査報告書を参照されたい。

1 水質調査

内の海の5定点（以下「定点」という。）において、水温、塩分、溶存酸素量及び透明度について月1回の調査を行った。

その結果、平成14年度の水温は12月から2月にかけて例年より低かった。塩分は、5月及び7月の表層以外は32.0を越え、特に11月から3月は33.0を越えており年間を通じて高かった。溶存酸素量は、7月にSt4の底層で0.79mg/lの低酸素が確認された。

2 底質調査

5月及び10月に定点において、TS、COD、強熱減量及び粒度組成について調査を行った。

その結果、5月ではTS:Tr \sim 0.25mg/g乾泥、COD:3.36 \sim 45.97mg/g乾泥、強熱減量:2.13 \sim 10.16%、10月ではTS:Tr \sim 1.14mg/g乾泥、COD:2.78 \sim 47.92mg/g乾泥、強熱減量:2.37 \sim 11.00%の範囲であり、湾奥部のSt3及びSt4で高い傾向が見られた。

3 底生生物調査

5月及び10月に定点においてサンプルを採取し、底生生物の種の同定、個体数、湿重量について扶養海洋（株）に委託分析した。

その結果、底生生物の生息密度は、5月:1,189 \sim 3,044個体/m²、10月:22 \sim 1,789個体/m²の範囲にあり、10月のSt3及びSt4で少なく、夏期の低酸素によって底生生物が死滅していると考えられる。

汚染指標種とされているシズクガイは、5月に4地点、10月に2地点、チヨノハナガイは、5月に1地点、10月に3地点で検出された。なお、ヨツバナスピオA型及びB型は検出されなかった。多様度は5月:1.80 \sim 4.20、10月:1.00 \sim 3.35であった。

4 アマモ場調査

漁場保全対策事業調査指針に基づき、鳴門市鳴門町高島地先のアマモ場に面積500m²の定点を10区画設け、5月及び11月に分布範囲、繁茂状況を船上から箱メガネで目視調査を行った。

その結果、平均生育密度はそれぞれ1.5m²及び1.3m²であり、湾口側に濃密な繁茂が見られたが、湾内側は消失しており、底一面アオサに覆われていた。この漂着アオサがアマモ場形成の阻害要因とかがわれた。

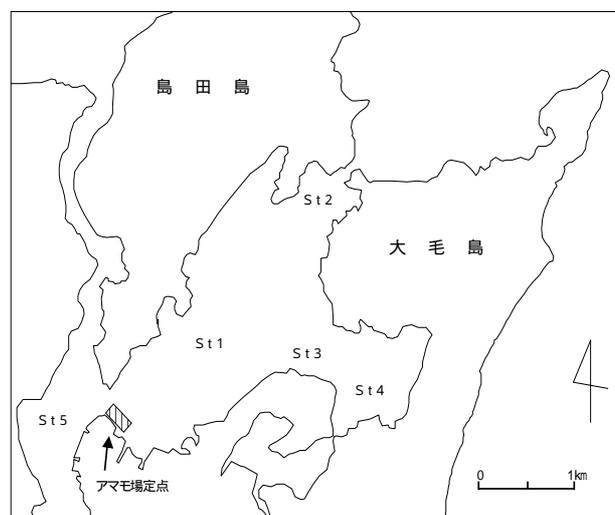


図1 調査定点図